

平家物語には、硫黄島の住民が九州の商人に硫黄鉱石を売る風景が俊寛の目を通して描かれていた。日本の中世後半以前の硫黄の交易状況を知る史料は、この俊寛の説話程度だったが、近年、その様子が詳しく解る遺物がみつかった。

**A** 2018年に福岡県博多区の冷泉(れいぜん)小学校跡地で11世紀～12世紀半頃の日宋貿易に使われた港の石積が発見され、その周囲から硫黄島産とみられる硫黄塊が複数発見された。

硫黄島産の硫黄鉱石は、九州西側の航路で一日博多の港に集められ、そこで宋行きの船に乗つて中国へ輸出されたと推定される。

石積から6m先に藻類の化石があるため、その辺りが波打ち際とわかった。おそらく硫黄塊はその手前で積荷中にこぼれ落ちたようだ。そして、奇跡的に落ち葉などの有機質の堆積物に埋もれることで分解されずに残った。硫黄はもろく、通常土の中では1週間ほどで硫黄酸化菌に分解される。**B** 今回、福岡市埋蔵文化センターでその硫黄を見せてもらった。

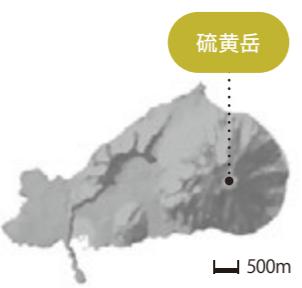
また、硫黄と共に生成される珪化岩の出土もあることから、**C** 噴気孔の形で運ばれると推測される。

火薬は宋の時代に軍事利用がはじまつたが、宋の支配域には原料となる自然硫黄が十分になかった。そのため海外に硫黄を求めて交易ルートが形成された。今回の一発見で、硫黄島は約100年も前に国際交易網の一端であつたことが明らかになつた。

### 思い出話

「硫黄が発掘されたので専門家に分析を依頼しましたが、古い硫黄が土中に残るはずがないと、はじめは信じてもらえませんでした。」

福岡県在住 60代 男性



# 3

## 硫黄島

### 俊寛の見た風景(日宋貿易)